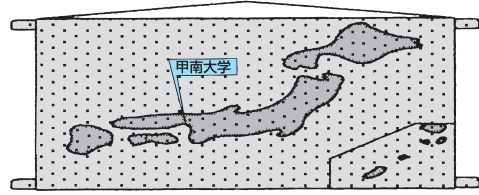


Zephyr

〈第68号〉

ゼフィール・にしかぜ



<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集＊世界の人々が見る日本》

★所長からのメッセージ：誤解されやすい英語の表現	津田 信男	2
〔英語〕 Many Paths, One Journey	Thomas Stringer	3
〔ドイツ語〕 ドイツから見る日本	野村 幸宏	4
〔フランス語〕 フランスの知識人が見た日本	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕 日本と中国、相互理解の旅へ	石井 康一	6
〔韓国語〕 日本社会の祭りにみる韓国語の残映	金 泰虎	7
〔日本語〕 外国人（留学生）が見た日本	谷守 正寛	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

言語交流に有効な「生きたコトバ」

グローバル時代を生きていくためには、自文化への理解を深め異文化圏に発信すること、そして異文化と対話する言語能力や文化力を養うことが非常に重要です。国際間の相互理解に必要となる言語コミュニケーション能力を養う一手段として、「生きたコトバ」に着目してみます。

文明の進展と社会情勢全般の変化にともなって、新しい事物を表すのに「新語」の導入が不可欠となってきます。いわゆる時代に適応した「生きたコトバ」を新しい語彙として取り入れることで表現力はぐっと高まります。言語間の相互影響による言語の「発展」⇒「進化」⇒「充実」の過程だと言えましょう。「外来語」は他民族言語から借用している言葉です。自国語の規則に従い「音訳」、「意識」、「音訳＋意識」などの手法によって、新語として導入されます。これは言語の発展過程における自然現象です。言い換えれば、現代の「情報伝達」の効率化という「発展」と見ることができます。

日本は2000年前から中国の漢字を導入し、中国の歴史や文化の精髓を吸収して、漢字から「ひらがな」と「カタカナ」を作り、さらに、「和製漢字(国字)」と「和製漢語」が作られ、日本独自の文化を築き上げ、繁栄してきました。今でも毎年大量の「外来語」を日本語に受け入れ、日本語の表現をさらに豊かにしています。一方、日本でできた漢字や語彙も外国に輸出され、諸外国の言語表現に豊かさをもたらしています。

異国で母国語に出会うと、それだけで親近感がわくものです。「生きたコトバ」は国際間の相互理解に大変有効なものです。これからどんな日本語が海外で活躍していくのか楽しみです。（胡 金定）

誤解されやすい英語の表現

国際言語文化センター所長 津田 信 男

最近あるマンションの玄関先にある「開放厳禁」“Opening Strictly Prohibited”という掲示が目にとまりました。この英語の表現では、ドアを開放すること自体が禁止されていることになります。もっと英語らしい表現にするには、“Please Keep the Door Closed”とするのが良いでしょう。このように日本では、ネイティブからするとおかしい英語表記が多々見受けられます。そこで、いくつかの例を通してもっと英語らしい、英語ネイティブ話者に通用するような表現を紹介しましょう。

1. “I want to get off the car.”「車から降りたい。」

電車やバスから降りる時は“get off”を使いますが、車の場合は“get out of”になります。「車に乗る」は“get on”ではなく“get in”です。「車に乗りますか？」と誘う場合、“Do you need a ride?”という表現をよく使います。

2. “I like this CM.”「このコマーシャルが好きだ。」 “I love SF.” 「SFが好きだ。」

“CM”も“SF”も和製英語で、全く英語では通じません。それぞれ、“commercial” “science fiction”となります。“science fiction”は、“sci-fi”と略すこともあります。

3. “I can calm down at home.”「家で落ち着くことができる。」

“calm down”は感情的になっている相手に、“Calm down.”「落ち着いて。」という時に使います。気分的に落ち着くは、“relax”の方が意味は通じると思います。

4. “I'd like to skill up my English.”「英語のスキルアップを目指したい。」

“skill up”は和製英語です。“I'd like to improve my English.”か“I'd like to develop my English skills.”の方が自然な表現です。

5. “I can use my smartphone every time, everywhere.”「スマートフォンならいつでもどこでも使える。」

文法は正しいのですが、“anytime, anywhere”の方が自然でよく使われます。“every time”は「毎回」という意味で、“everywhere”は「同時にいたるところで」というような意味になりますので、この文の場合不自然です。

6. “Put off your shoes.”「靴を脱いでください。」（あるお寺での標識）

靴をはくは“Put on your shoes.”なので、その反対は“put off”であろうと勘違いしたのだと思います。“put off”は「延期する」という意味ですので、“Let's put off the meeting.”「会議を延期しましょう。」という時に使われます。「靴を脱いでください。」は“Take off your shoes.”です。

もっと自然な英語を身につけるにはどうしたらよいのでしょうか。一番良い方法は多読をすることです。私のお勧めは、ラダーシリーズというIBCパブリッシングの本です。これは巻末にワードリスト（全単語の意味リスト）が付いています。“The Steve Jobs Story” “The Kei Nishikori Story” “The Barack Obama Story”など読みやすく、親しみやすい本があります。また、Disney Publishingでは、“Frozen” “Zootopia” “Moana” “Minions”など映画化された本がたくさんありますし、口語表現を学ぶことができます。是非英語学習を通して自然な英語を身につけてください。

Many Paths, One Journey

国際言語文化センター英語特定任期教員 Thomas STRINGER

I want to play a game with you. I'm thinking of a country. I'll describe it, and you guess it. Hint 1: this country is small, made of islands, but has many people. Hint 2: People in this country are proud of their unique culture. They want to protect it. The people are also shy, indirect, and private, with strict manners and ideas about social status. No ideas yet? Ok, on to hint 3: Common symbols of this country are tea, hospitality, gardening and fish-based food. "Surely...you must mean Japan?" you may be thinking. However, the real answer is the United Kingdom, U.K. for short. To be sure, the U.K. and Japan have many similarities. However, when I thought about the question, "*How do people from the U.K. see Japan?*" I had to do some research. I asked U.K. tourists and immigrants, short and long term, to share their thoughts about Japan. I heard many different stories from people on their own special paths. Some were here 24 hours, some a few months. Others had lived here over ten years.

First, I asked people how they felt about Japan before visiting here the first time. Their answers were mostly the same. Thinking about Japan was like planning a holiday to the moon: cool and exciting, but completely beyond the imagination and a little crazy. U.K. people who have not visited Japan mostly think about symbols: sushi, robots, crazy Kit-Kat flavours and '*kawaii*'. They can't easily imagine the real Japan. Next, U.K. tourists shared their thoughts about Japan. The tourists told me more about the real Japan, not just symbols. I heard about on-time trains, convenience, delicious food culture, surprising natural beauty and exciting festivals. Many tourists also mention the drinking culture. Most also told me about simple acts of kindness they experienced from Japanese people: invitations to dinner, getting directions when lost, and so on. Despite many communication difficulties, short-term visitors to Japan I spoke to had positive experiences.

Lastly, I also spoke to current and former U.K. immigrants. They are charity workers, academics, English teachers, comedians, yogis, tour operators, school owners, bar owners and working parents. These people all chose to live here at some point: some stayed, some left. I wanted to know their reasons. First, I asked about why they came to Japan. They were all very different. Some had dreamed about Japan for years. Others came for the language or for love. Several people came here without really thinking. However, Japan offered most people new experiences and adventure. Following this, immigrants told me about the reasons why they stayed or left Japan. Life can be easy, safe and comfortable here, especially if you have a strong community of friends or have started a family. For entrepreneurial people, Japan can be a great place for small businesses or passion-projects that may never have opened in the UK. On the other hand, many workers had bad career options in Japan and left. Several people spoke about the xenophobia that immigrants often experience in Japan. Some people found this impossible, and left. Those who accepted it and stayed made meaningful connections to Japan: family, friends, business and hobbies.

As you can see, it's impossible to give one answer to, "*How do people from the U.K. see Japan?*" Individual people have their own paths. However, for me, the message was clear: it's important to go beyond symbols. Japan is more than sushi and robots. When you go beyond symbols, you will find good and bad. However, that is why travel is the best. I encourage you to travel often, explore the world, learn deeply, and decide for yourself. As Tolkein says, "Not all those who wander are lost." What path will you take?

unique 独特	symbol 象徴	entrepreneurial 企業家的な	passion-project 好きでするプロジェクト	immigrant 移住者	academic 学者	xenophobia 外国人恐怖症	wander ぶらつく
--------------	--------------	--------------------------	--------------------------------	------------------	----------------	----------------------	----------------

ドイツから見る日本

Kultur

国際言語文化センター講師 野村 幸宏

前号、ドイツ語担当からは「日本におけるドイツのイメージ」について書きました。本号では逆の視点から、「ドイツは日本を、日本人をどのように見ているのか」をテーマにしてみましょう。外国から見た日本のイメージとして真っ先に浮かぶのは何でしょう？ 歴史や伝統に興味のある方はきっとお寺や神社、着物や京都の舞妓さんなど、現代文化ならマンガ、アニメやゲーム、社会・経済なら先端技術や世界で活躍する有名企業の名前も出てきそうです。また、柔道や空手のスポーツや忍者、侍といった連想も一般的なのではないでしょうか？ また、地域や世代によってもイメージは異なりそうです。私が学生としてドイツに留学していたころは（1990年代前半ですが…）、好調な日本経済と企業の世界進出や、4～5日でヨーロッパの観光名所をせかせかと回って、写真を撮りまくりブランド物を買いたる奇妙な団体旅行をする人たち、という印象をよく耳にしましたが、2000年代に入ってからまた違った日本像が広まっているように感じられます。

さて、現代におけるドイツが見る日本像ですが、Vielflieger Treffという、よく旅行する人たちが集まるドイツの掲示板サイトに「日本について連想するものは？」というスレッドが立っていたので、そこから主要な意見をピックアップしてみましょう（www.vielfliegertreff.de/forum.php）。スレッド主は、仏閣、寿司、マンガ／アニメ、勤勉さ、異常に混雑した地下鉄を挙げていました。以下複数の人が挙げていたものとして、技術革新、清潔さ、列車がぴったり定時に来ること、公共の場でのマナーや礼儀正しさ、どこにでもある自動販売機とコンビニといった書き込みが目立ちました。こう並べてみると、一度日本に来たことがある人たちが書き込んでいるケースが多そうです。日本を少し批判的な目で見ている投稿もありました。極端に仕事中心の生活、意味のない長い会議、自分でものを考えず言われたことを淡々とこなす従業員、決断の遅さ、極端に短い休暇、異なるものを排除する画一的な社会などなど…。日本で仕事をしたことのある方の書き込みかもしれませんね。これを書き込んだ方は最後に、「それでも美しい国なんですけどね」とフォローも入れてくれました。

こうした日本に対する連想や印象を並べてみたとき、それらが正しい、正しくない、良い、悪いというのが問題なのではありません。ましてや日本についてのネガティブなコメントを見て、「チッ！」なんて思ってしまうのは（気持ちはわかるものの）論外です。これらの日本に対するイメージは、ドイツ社会やそこに住む個人々の「常識」や「価値観」のフィルターを通して出てきた、「日本に関して目につくこと」の単なる列挙に過ぎないのです。彼らはあくまでも、自分にとって目立ったもの、「普通」ではなかったことを述べているだけで、それをもって日本を評価しようとしたものではないのです。

大切なのは、「なぜ日本に関してそうしたイメージが出てきたのか」という部分だと思います。その問いに対する答えは、実際にドイツの人々の暮らしぶりを見て、体感することで見つけることができます。例えば、ドイツの地下鉄や通勤電車の込み具合はどうか、ドイツでの人々の公共マナーはどうか、そしてドイツ人の働き方や仕事の進め方など、私たちが彼らにとっての「常識」を知ること、彼らの日本に対する印象をより深く理解することができるのではないのでしょうか。ドイツに住む人々が日本の生活や社会を知り、日本に住む私たちがドイツの生活や社会を理解することで、お互いに対して「なるほど、そういう感想が出るのも当然だな」、と思えることが増えることでしょう。まさにそれが、国際的な相互理解の大切な一歩だと考えます。単に外国に対して、日本に対して「イメージを持つ」ということは誰にでもできることなのですが、それを理解するというのは、それなりの経験をした人以外には大変難しいことなのです。是非、学生時代に見聞を広めて、様々な立場で世界を、日本を見ることができるよう目を養ってくださいね。

最近のフランスでは、日本への興味が益々高まっています。漫画、アニメ、映画などの人気のお陰です。ここでは、かつて日本がフランスの知識人に与えた影響について紹介したいと思います。

日本とフランスの外交関係が正式に始まったのは1858年です。1876年には、リヨンの実業家エミール・ギメ **Émile Guimet** (1836-1918) が、挿入画家フェリックス・レガメ **Félix Régamey** (1844-1907) と一緒に来日しました。ギメは、極東における宗教の調査するためにフランス政府から日本に派遣されました。彼は、日本に滞在後、1877年に中国とインドを経由して帰国しました。そして、持ち帰った多くの美術作工芸品を集めて、1879年、リヨンに美術館を創設しました。その後、この美術館はパリに移され、「ギメ美術館」 **Musée Guimet** として今日に至っています。

一方、文学の世界では、19世紀は旅行作家の時代です。中でも、初めて日本を題材にしたのは、ピエール・ロティ **Pierre Loti** (1850-1923) で、彼はフランスの海軍士官として1885年から1901年の間に5回日本に滞在しました。ロティには二面性があります。まず、『お菊さん』 **Madame Chrysanthème** (1887) では、彼は日本人を皮肉的に描き、日本文化を理解していなかったように思われます。ただ、その後の『秋の日本』 **Japoneries d'automne** (1889) で、別の顔が現れます。彼は、日本文明の豊かさを認め、明治維新の流れの中で、西洋化し続ける日本の未来を案じています。この意味で、彼は新たな潮流を生んだ作家だと言えるでしょう。それ以前には無視されていた東洋の文化の価値が、やっと認められ始めたからです。そして、この動きは20世紀の知識人たちへと連なります。最初の例はポール・クローデル **Paul Claudel** (1868-1955) です。彼は、著名な詩人ですが、1921年からフランス大使として東京に6年間駐在しました。保守的なブルジョワジーに属するクローデルにとって、日本での体験は世界観を変えるきっかけとなりました。日本の文化、特に日本の伝統演劇について、クローデルはさまざまな論評を残しました。例えば、能について、彼の残した有名な一節があります：「芝居では何かが起きる、能では誰かが現れる。 **Le drame, c'est quelque chose qui arrive, le Nô, c'est quelqu'un qui arrive.**」

ロティやクローデルの例が示しているのは、フランス人にとって、日本との出会いが自分の考え方や価値観を相対化する機会となったということです。クローデルには二人の後継者がいます。一人は、作家であり文化大臣も務めたアンドレ・マルロー **André Malraux** (1901-1976)。彼は、1931年から何回も日本を訪れて、日本の絵画・工芸・建築に魅了され、特に自然と融合した日本の寺に強い関心を持ちました。もう一人は、ロラン・バルト **Roland Barthes** (1915-1980) です。彼は1966年から1968年の間に3回日本に滞在し、1970年に『表徴の帝国』 **L'Empire des signes** を著しました。バルトは日常的な場所(レストラン、駅など)や日本の詩(特に俳句)の体験を通して、自分が感じ取ったことを印象主義的に伝えました。バルトの考えでは、日本社会では、様々な記号が非常に複雑に戯れていて、西洋と比較すると根本的な違いがあります。西洋では、最終的な機号は一神教の「神」です。日本は、全知全能の神のいない世界で、キリスト教の西洋とは根本的に違っていると述べています。それぞれの知識人の解釈には異論の余地もありますが、どちらも日本観を豊かにしたことは確かです。

このように、近代以降、日本の文化は、芸術面での異国趣味の対象を超えて、フランス人の精神や存在に至る深い次元にまで影響もたらしたと言えるでしょう。

- 中国から日本へは、「爆買い」の旅から、より深く日本を知り楽しむための旅へ移りつつあるようです。下は日本の電車内での中国語での会話です（参考図書①）。

鈴木 電車の中で小さい子が騒ぎ出すとお母さんはとても大変です。

池 でも小さい子が騒ぐのは当たり前でしょう。あんなに必死になってあやす必要なんてないのに。

鈴木 日本では子供たちは「人に迷惑をかけてはいけない」と教わります。あの母親は「人に迷惑をかける」のがいやなんです。中国でもこういうことはありますか？

池 小さい子が泣いたって全然迷惑じゃありません。みんなでその子をあやしたり、だっこしたり、可愛がりますよ。

鈴木 そうですね。私も中国でそういう場面を見ました。「人に迷惑をかけてはいけない」という考え方も時によりますね。

池 そうです。子供が騒ぐのは迷惑ではなくて、大人たちの喜びです。社会に活力をもたらしてくれるんですから。

たくさんの方が日本に来て、異文化の衝突から相互理解への展開がたくさんあるといいなと思います。私も中国に半年滞在した後は、中国式を見習って、お年寄りや小さい子供に、これまでより積極的に席を譲るようになりました。

- 10月の国慶節期間に神戸のある店で、北京から来た老婦人と娘さんがレジの店員の不機嫌な対応に困っているのを、言葉の面でサポートすることができました。わざわざ遠くから来てくれたのですから、日本を大好きになって帰ってもらいたいものです。中国語を学んでいる学生の皆さん、「活躍」する場面はたくさんあります！ 難しいことをしゃべる必要はありません。基本フレーズの組み合わせで、中国語圏からのお客さんを歓迎しましょう。

- 中国で《知日》（日本を知る）という雑誌がよく売れていることは、日本のメディアでもたびたび取り上げられています。上級中国語の授業で講読しますが、我々にとって当たり前のことが中国人にとって驚きであることが面白いですね。

- 北京では年輩の人々の朝の活動を見るのが好きで、大きな公園へよく行きます。「日本人？ 日本、行ったよ。きれいなところだねえ。北京に来たらホテルになんかに泊まらないでうちに泊まりなさい」と親切に言ってくれる人もいます。学生の皆さんも相互理解の旅へ——来年の夏休みに北京郵電大学へ行く「海外語学講座Ⅱ」に参加することをおすすめします。始めの一週間は私が引率します。しっかり中国語を勉強して、街へ出ておいしい北京ダックを腹一杯食べましょう！

●参考図書・読書案内

- | | |
|--|---|
| ① 塚本慶一・芳沢ひろ子『中国語で案内する日本』研究社2015 | ⑩ 横山宏章『反日と反中』集英社新書2005 |
| ② 毛丹青ほか『知日——なぜ中国人は、日本が好きなのか』潮出版社2015 | ⑪ 天児慧『中華人民共和国史』岩波新書1999 |
| ③ 毛里和子『日中関係——戦後から新時代へ』岩波新書2008 | ⑫ 興梠一郎『中国激流 13億のゆくえ』岩波新書2005 |
| ④ 毛里和子『日中漂流——グローバル・パワーはどこへ向かうか』岩波新書2017 | ⑬ 服部龍二『日中国交正常化』中公新書2011 |
| ⑤ 張競・村田雄二郎『日中の120年 文芸・評論作品選』全5巻 岩波書店2016 | ⑭ 橋爪大三郎×大澤真幸×宮台真司『おどろきの中国』講談社現代新書2013 |
| ⑥ 園田茂人編『はじめて出会う中国』有斐閣2013 | ⑮ 家近亮子ほか編著『改訂版 岐路に立つ日中関係』晃洋書房2012 |
| ⑦ 劉文兵『日中映画交流史』東京大学出版会2016 | ⑯ 弓削俊洋編著『中国・台湾における日本像——映画・教科書・翻訳が伝える日本』東方書店2011 |
| ⑧ 国分良成ほか『日中関係史』有斐閣2013 | ⑰ 林竹『林竹闯关西』上海動画大王文化伝媒有限公司・上海人民美術出版社2013 |
| ⑨ 『北京の日の丸——体験者が語る占領下の日々』岩波書店1991 | |

日本社会の祭りにもみる韓国語の残映

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

日本社会では、至る所で祭りを行う光景を目にすることができます。祭りでは、概ね御輿を担ぐ担ぎ手と集まっている群衆が一体となって大きな声を上げたりします。その御輿の担ぎ手と群衆が掛け声を出しながら、御輿を担ぎ上げたり激しく動かしたりすることで祭りのクライマックス（Climax）を飾るのが一般的と言えます。

これらの祭りにおける掛け声は多種多様ですが、その中でも「ワッショイ」と発することがあります。正式には「お神輿ワッショイ」です。担ぎ手が「ワッショイ」を叫ぶと、集まった群衆もそれに負けず、大きな声で「ワッショイ」で返します。この「ワッショイ」という掛け声は、前近代に韓国語の「瓮缶（ワッソ）」（参りました）が伝わり、それが訛って「ワッショイ」に定着した言葉だと言われています。韓国の慶尚道の地域では、未だに「ワッショイ（瓮缶イ）」という訛った言葉を使っています。訛った掛け声の「ワッショイ」ではなく、訛っていない韓国語の「ワッソ（瓮缶）」を用いる祭りもあります。それは1990年から毎年11月3日（文化の日）に行われる大阪「四天王寺ワッソ」祭りで、韓国語の「ワッソ（瓮缶）」という現地音を掛け声にしています。

そこで、「参りました」の「ワッショイ」という掛け声の主体は神輿（神）です。冒頭で言及してきたように、正式な掛け声が「お神輿ワッショイ」であるため、神輿という主体の視点に立った担ぎ手の掛け声だと考えられます。不思議なのは担ぎ手と同じく集まっている群衆、つまり迎え入れる側までもが「ワッショイ」という掛け声を発することです。では、祭りにおける神輿の担ぎ手と群衆はともに主体の立場の掛け声を発しているのでしょうか。

主体を含む祭りに関わる全員が「ワッショイ」と叫ぶのは、主体を迎え入れる側がいなくなる結果に繋がります。このことは祭りに主体だけがいて、迎え入れる側のない変な形になります。筋的には主体の「ワッショイ」に対して、迎え入れる立場の群衆は「いらっしやいませ」と言わなければならないと考えます。

しかし、主体と迎え入れる側の関係に基づいて鑑みると、「ワッショイ」では、次のことが推測できます。主体の神輿と担ぎ手の「ワッショイ」は平叙文の「参りました」、一方、集まった群衆の掛け声の「ワッショイ」は疑問文、つまり主体が参ったのかを確かめる「ワッショイ？」（参りましたか？）のことで語尾を上げる掛け声であると考えます。こう考えると、主体と迎え入れる側が成立します。言い換えれば、祭りのクライマックスにおける担ぎ手と集まっている群衆の「ワッショイ」の合唱は、平叙文と疑問文の掛け声の応酬なのです。

滋賀県近江八幡市にある日牟礼八幡宮の周辺では、毎年3月15日に近い土・日曜日に「左義長祭」が行われます。この祭りでは珍しく神輿の担ぎ手は「ヤレヤレ」、一方、集まっている群衆は「マッセマッセ」という掛け声を発します。この「マッセ」は、日本語では該当する意味合いが見つかりません。前近代に伝わった韓国語の由来という視点に立って考えてみると「マッセ」は韓国語の「맞세」の「迎えよう」という意味になります。御輿の担ぎ手の「ヤレヤレ」は、迎え入れる側が「マッセマッセ」（迎えよう迎えよう）という返事をするよう促す掛け声と考えます。つまり担ぎ手の掛け声は、迎え入れてほしいという主体の神輿の立場を代弁しつつ、群衆には迎え入れるよう催促をする形です。

要するに、「ワッショイ」では主体の神輿が「参りました」という担ぎ手の報告に、群衆は「参ったのか」を確かめ、「ヤレヤレ」と「マッセマッセ」では担ぎ手が群衆に御輿を迎え入れる答えを促して迎え入れるパターン（Pattern）になるのです。いずれにせよ「ワッショイ」と「マッセマッセ」という掛け声には、前近代の日韓交流によってもたらされた韓国語の残映であると考えられます。



「世界の人々が見る日本」を語る時、最近ではネットというツールを使って即座にそうしたコメントや大々的な意見まで知ることができますが、ここでは受け売りにならないよう、私の直接体験で外国人留学生から直に聞いたごく些細なネタを題材にして話したいと思います。日本に住んで驚くことを留学生に聞くと意外なことが聞き出せて、なるほどその学生にも時には日本にも感心します。日本を見直す手掛かりにもなるかもしれません。

一つは、子供が親の同伴もなくランドセルを背負って電車で通学しているのが驚きだということです。そこでよく観察すると確かに朝夕の通学時だけでなく、たまに夜遅くでも塾帰りの小学生が大人の同伴もなく電車に乗っている姿を見かけるのに気づきます。私の住む田舎でも暗い夜道を一人で帰る学生の姿を見かけます。指摘されると確かに少し心配になりますが、こんなことはこれまで気にも留めたことがなかったことです。日本人はやはり無防備なのでしょう。電車の話ついでに言うと、「女性専用車両」という独特のものがあります。痴漢防止のためとは言え、冤罪やそれで逃げ出して轢死した者もいるという話は学生には衝撃的だったようで、恐れおののく者もいました。余りに恐れる学生がいたので私も改めて怖くなってきましたが、特殊な電車事情を考えると、今や留学生にも冤罪に気を付けるようにしておくのがいいかもしれません。

アメリカではレジのある店でも数円程度のお釣りがたまたまに要らないと言う客がいたり（日本ではそう言うと店員が困るでしょうしポケットマネーにするのもだめです。募金箱ならいいとしても）、店員からもらえないことがあったり（私の実経験）、小銭については大雑把な感覚のようですが、日本で買い物をする時1円たりとも違わず正確にお釣りをもらいます。それで小銭を大事にする習慣が良いと気付いたとか、それまで持ったこともなかった小銭入れをわざわざ買って持っていると言う学生がいたのですが、これには感心しました。細かなモノにまで注意を払う日本の良いシステムなのでしょう。ただし厳密すぎる割り勘文化は時には閉口します。店相手と友達相手とは区別すべきでしょうか。

店員が客に対して礼儀正しいことはよく聞きますが、何も買わずに店を出ようとしても「ありがとうございました」と言われるのが理解できないと言う者がいました。店に何も儲けさせていないのに、なぜお礼を言われるのかと外国人に聞かれたら、どう説明しますか。店に来てくれただけでお礼を言うのは国際感覚では難解なのでしょう。何も買わない客に皮肉を言っていると思うかもしれませんね。

最後に、一般に外国人は恩恵を受けた時に感謝を述べても、再び会った時にまた感謝の言葉を繰り返すことはありません。日本人は何かしてもらった時にお礼を言い、後日再会した時にも「この前はどうぞ」と言うことがあります。二回も同じことに対してお礼を言うのも、言われてみれば可笑しいことかもしれません。最近はこの習慣も衰退している気もしますが、これには続きの話があり、ある時木綿の酒袋に入った地酒のお土産をくれた留学生に私がお礼を言い、その酒袋がとても気に入ったので後日またその学生に「この前の酒袋、とても格好いい物ですね。ありがとう」と言うと、なんとその学生はまた同じものをけっこう高いのにわざわざ買って持って来てくれたのです。たとえ良い物でも二つも要らないのにわざわざ買って来たのだらうと思いましたが、その後似たような経験を通して気が付きました。わざわざお礼を繰り返すということは、それをまた欲しがっているのだと相手が解釈するわけです。そこで外国人なりの気配りを知りました。高齢の日本人が何度も頭を下げてお礼を言うのはなぜですかと聞いた学生もいましたが、もしかしたら、なぜ品の良さそうな人が「もっとくれ～、もっとくれ～」と何度も要求しているのだらうと疑問に思ったのかもしれません。日本の謙虚なはずの習慣が図々しい要求に解釈されたとしても、それに応えてくれた外国人の気遣いには頭が下がります。私も今ではお礼を繰り返す人を見るとまた要求しているように聞こえてしまうので、私はもうそうしないようにしています。